

和訳要約

為替レート変動による食料供給に対する影響測定モデル

- - 非貿易農産物を主体として - -

ファン・デ・ディオス・マツス・V、伊東正一、宇佐見晃一

本研究の主な目的は基本的な新古典派経済学の理論に基づいて為替レートの変動と食料供給との関連性についてそのフレームワークを南米の状況について明らかにしようとしたものである。研究の方法として、実質為替レート (RXR) をマクロ経済学的政策の一手段として利用し、食料供給が RXR の切り下げにどのように反応するか、また、非貿易農産物 (NT) の一人当たり食料供給における重要性について、アルゼンチン、ブラジル、ボリビア、及びベネズエラの4カ国を例にとり分析を試みた。計量分析の結果は、マクロ経済学の理論が示すように、為替レートの切り下げは輸入を減らし、輸出を拡大させ、貿易収支を改善させる働きをする。中でも、輸出品目 (E) や輸入代替品目 (MS) は NT より大きな反応を示している。また、所得配分においては、輸出の関係者が多くの富を占め、E や MS の増産がみられる。しかし、NT の生産は片隅に押しやられ、価格の低迷そして所得の低下とともに生産者も新しい品目への切り替え、または離農して都市に移住する必要性に迫られる。また、為替レートの切り下げは貿易の重要性をより高くし、国内における NT の減産を補うためにも輸入農産物の拡大が求められることとなる。